

日本記者クラブ会報

第335号
1998年
(平成10年)
1月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100 1011
©社団法人 日本記者クラブ
電話三五〇三―二七二二(代)

不透明な

変化の時代にライトを

理事長 加藤 博久

会員のみなさん、新年おめでと
うございます。

日本はいま、大きな転換期にあ
ります。冷戦終結後、世界が単一
市場となり、市場経済の大波の中
で、行政や財政、金融のシステム
が変化に対応できなくなつて改革
が迫られています。

大手証券会社や地方有力銀行の
経営破たんが相次ぎ、金融ビッグ



バンを目前にして厳しい淘汰の時
代に入っています。田安、株安は

景気低迷を長引かせ、世界の不信
感を募らせています。中央省庁を
半減するという大胆な改革は、行
政の効率化と官のリストラを促し
ています。

深刻な財政危機克服と少子・高
齢化時代に備えた財政改革法は成
立しましたが、橋本政権が掲げた
六つの改革がどこまで具体化でき
るか――新世紀の日本の行方を左
右する重要な課題であります。

昨年、神戸で起きた中学生の児
童殺傷事件は、大きな衝撃を全国
に与えました。そこにはメディア

社会が成長期の子どもに与える影
響、豊かさの中で失われた欲望の
抑制やモラルの喪失、家族や教育
のあり方など、日本社会に潜む病
巣が映し出されたともいえます。

日本は制度やシステムなど構造
改革を進めるとともに、自らの足
元を見つめ直し、新たな価値観を
創造する時期にあるのではないで
しょうか。進展するグローバルゼ
ーションの中で市場原理に沿う体
制を整備する半面、伝統や文化を
見直し、日本人のアイデンティテ
ィを考えるべき時ではないか、
と、いつてよいかもしれません。

このような時代のジャーナリス
ムの役割は、まことに大きいとい
えます。的確で多面的な情報の提
供、蓄積された知識やデータに基
づく分析、論理的で説得力ある論
評、時には多数意見を大胆に批判
する勇氣、洞察力に富んだ問題提
起や提言といった報道、評論活動

は、不透明な変化の時代の道筋に
明るいライトを当てることになり
ます。

新聞、テレビなどマスコミ批判
は相変わらず厳しいものがあり、
それはそれで正面から受けとめて
いかなければなりません。健全
なジャーナリズムこそ重要です。
多メディア時代に入り、情報過多
ともいわれる中で、とりわけその
感を深くします。

日本記者クラブは、内外の要人
会見や研究会などを活発に行つて
います。とくに昨年来、企画委員
会のご努力で、当クラブ会見の権
威を高める方策を検討しており、
外国トップの国内会見を優先的に
開けるよう関係方面に協力を要請
しています。

また、クラブの施設整備も進め
ており、みなさんの飲食懇談の環
境改善に努めています。本年も親
睦や勉強のためクラブの活用をお
願いするとともに、会員各位のご
多幸を祈つて年頭のごあいさつと
いたします。

(読売新聞大阪本社代表取締役社長)

新春随想

新聞の原点を固め直せ

中江和志

マルコ・ポーロの『東方見聞録』から、今年でちょうど七百年になる。正確にいうと、一七〇年から九五年まで知られざるアジアを回って故郷のベネチアに帰ったマルコは、九八年にジェノバとの戦争に参加して捕虜となり、獄中で同室の物語作家にアジア旅行の体験を口述する。後に広く書き写された『見聞録』は、こうして出来上がったものである。

中世の「世界」の常識がヨーロッパだけからアジアに広がり、二百年後のアメリカ「発見」にもつながったこの記録は、いわばグローバル化にメディアが決定的な役割を果たした、最初

のケースだった。

いま、世界のメディアは、デジタル・ネットワーク化とともに新たなグローバル化、多様化の波に、洗われつつある。相対的に遅れていた日本での衝撃は、「メディア・ビッグバン」とも呼ばれている。

確かに、インターネット、多チャンネル衛星テレビや携帯用端末機器など電子メディアが急激に普及して、新聞などの文字メディアが守勢に立ち、危機に直面しているように見える。

しかし、情報化時代になればなるほど、また情報メディアの多様化が進めば進むほど、やはり情報の質の高さが、決め手に

なってくる。情

報の内容がいか

に豊富で、正確

で、分かりやす

いか、あるいは

説得力がある

か。そして、他

のメディアには

ない独自性があ

るか。つまり、

在価値であることは古来変わら

ないが、特に新聞が百年以上の

歴史の中で培ってきた、独自の

取材の積み重ねとチームワーク

による調査報道が、いよいよ真

価を発揮する時代になった、と

いえる。

さらに、国内でも世界でも、二

十世紀の世紀末的な現象が多発

し、戦後体制の崩壊と混沌も続いて、二十一世紀の新しいパラダイムはなかなか構築されよう

調査報道が真価を発揮する

では、新聞が情報の質の高さと独自性をもう一段発揮して、「メディアの中核」という伝統を維持できるようにするには、具体的にどうしたらいいか。

第一には、やはり調査報道に徹して特ダネ情報を発掘し、さらに当面の大きな問題に対してもっと「提言・論争ジャーナリズム」を展開することである。特ダネがメディアの原初的な存

在価値であることは古来変わら

ある。

紙面の多様化と重点編集とは、一見矛盾するようだが、決してそうはならない。年齢層、性別、職業別などによって読者のニーズは大きく変わってきているが、キメ細かくこれに対応した紙面づくりが一層求められ、同時にそれぞれの紙面には、専門家の評価にも十分堪えられような詳しい内容と質が要求されてきている。

スペース的に限られた紙面だが、これらを朝夕刊、週間、月

なかえ、としただ会員 一九二九年生まれ、千葉県出身。東京大学文学部社会学科卒。五三年朝日新聞入社。東京本社経済部長、編集局長などを経て、八九年社長、九六年から相談役。九一年から九五一年まで日本新聞協会会長。八八年七月から八九年五月まで日本記者クラブ理事長。現在、名誉会員。



間、あるいは年間の流れの中で計画的に振り分け、それぞれ重点的な編集で展開していけば、文字メディアとしての特性は十分に発揮できると思う。

また、インターネットを中心に情報の双方向性が高まっているので、ありきたりの投書欄などでは読者は満足しない。例えば、取材された、責任ある回答を必ず同時掲載したり、読者の代表が直接、責任者から回答を引き出して紙面化する形も、出てこよう。

「編集権」の問題をクリアしなければならぬが、読者に一定のスペースを提供して自由に紙面づくりをしてもらうような試みも、出現するかもしれない。

本質は現場にある

第三には、やはり根本に返って、記者の質をもっと向上させる教育の問題に、突き当たる。

昨年十月十六日、仙台で開かれた第五十回新聞大会で「現代の新聞を診る」と題して講演し

た中坊公平・元日弁連会長は、最近の新聞記者があまり現場を踏んでいないことを指摘、自らの弁護士としての体験を披露しながらこう訴えられた。

「現場には小宇宙があり、必ず本質があることが分かる。現場で本質を知ったとき、初めて情熱がわいてくる。何となくおかし、これは正しいという直感も大切に、現場の体験の積み重ねでしか養成できない」

規制や検閲と戦ってきた戦前の新聞と違って、戦後の新聞は商法の例外規定などで甘やかされて「第四の権力」となり、建て前と本音が乖離して大衆から見放されてきている——との厳しい指摘から説き起こされた中坊氏は、この現実を正すためには現場主義に立ち返るしかない、と喝破されたわけである。

新聞協会が一年置きに実施している「新聞信頼度調査」の昨年の得点が40（九一年77）と、過去最低になった。特に、報道の正確さの得点は九一年から半

減して49、意見を公平に取り上げていないかの得点は六分の一の6に落ち込んでしまった。現場に徹して報道していれば、信頼度はもっと高かったはずである。

そしていま、巨大国際資本をバックにしたデジタル・ネットワーク化の大波が、言論よりも利益を優先させる形でメディアを直撃しつつある。米ニーマン財団のジャーナリスト・プログラム最高責任者ビル・コバッチ氏が昨年七月二十三日、日本新聞協会での講演会で訴えたように、「うわさと真実を見極め、影の力を表面に引き出す」ジャーナリズムの復権と、そうした筆力と専門知識をもつ記者の養成が、喫緊の課題になってきた。

電子情報化も取り込んだ「メディア複合体」への発展が来世紀の命題であるならば、私たちはなおさら、「基幹メディア」としての新聞の原点を、しっかりと固め直すところから始めなければならぬ。

年二千回を誇る記者会見 —ワシントンNPCを訪ねて

専務理事 那部 吉正

あけましておめでとうございます。私にとっては記者クラブでの初めての正月です。よろしくご指導ください。

さて、事後報告になりますが、昨年暮れに約一週間、事務局の石川洋主管と日本プレスセンターの柿原健技術課長の三人で、ワシントンDCのナショナル・プレス・クラブ（NPC）へ勉強に行ってきました。



NPCビル全景：クラブは13階、14階（最上階）を占有

正直に言って、見るもの、聞くもの、すべて驚きの連続でした。度肝を抜かれたのは、何と言っても昼食会・記者会見の数の多さです。年間二千回を超す、というのです。当クラブは、昨年八十五回でしたから、その二十三倍に当たります。ただ、クラブが主催する会見は二百回だそうですが、それでも二倍強になります。

それなら、残り千八百回は何なんだ、ということになります。クラブが全く関知しない非会員の企業や諸団体、個人の主催する記者会見などでした。クラブは記者会見の場を提供することで、飲食のケータリングや部屋貸しで

収益を上げていたのです。

つまり、空いている部屋があればどんどん一般貸し出しをして、その「あがり」で会費を安く押さえ、会員サービスに徹しているのです。クリスマス前で行事が少なめ、という十一日の日程でも、クラブ主催の三件を含めて計九件。飲食の提供などで収益を上げる大小の会合が六件もありました。

クラブ財政の健全化を強調するブルーム総支配人は「五年ほど前からビジネスとして発想を転換した。おかげで、その後は黒字経営だ」と胸を張り、サモン会長も「収益があつてこそクラブ主催のいろいろな活動が可能になる」という割り切り方でした。

そこで、彼らがカネ儲けまでして行う会員サービスですが、なるほどその徹底ぶりは半端ではありませんでした。

その一、会員に朝食の無料サービス。その二、各施設は朝七時から夜十一時までオープン。



ビル・リチャードソン米国連大使の昼食会（12月9日）：食事後、冒頭発言から質疑応答まで、立ちっぱなしの会見

その三、クラブレストランでの昼食は、ピュッフェ方式なら約八百円で食べ放題。

まだまだありました。会員は、フィットネスクラブで汗を流し、バーボン片手に夜十一時まで政局や文化・芸術談議。ジャズ鑑賞会にダーツ大会。スポーツやミュージカルのチケットが安く手に入るほか、格安海外ツアーも年三、四回は実施されていました。まさに、いたれり、つくせりです。

クラブ主催の記者会見のうち、花形は何と言っても昼食会です



リチャード・サモンN.P.C.会長(中央):歴代中で最年少の32歳

が、この他、朝と午後に行う記者会見と複数ゲストを招くセミナー形式のフォーラムなどがあります。昼食会は最も大きな「ボールルーム」を使い、人数に応じて東西の部屋をつなぎます。当クラブの十階ホール(A.B.C.連結)に、さらに九階の大会議室を合わせたほどの広さですから、いかに大きいかがおわかりでしょう。

滞在中、リチャードソン米国連大使とケネディ上院議員の昼食会に出るチャンスがありました。ケネディ議員の時は三百人を超す出席者があり、スペースをフルに

活用していました。

いずれも大盛況。でも、何か変なのです。テーブル席でメモを取っている人がほとんどいないのです。話に相いづちを打ち、大きな拍手を送っていた大半の出席者は、テーブル席を丸ごと買い占めたゲスト・スピーカーや関連諸団体、PR会社の招待客だったので、現役記者のほとんどは、食事なしで一階上の十四階バルコニーに陣取って取材をしていました。食事などをしていては、仕事にならない、ということでしょうか。チケットの代金も、会員二千五百円、非会員三千四百円と差をつけ、ほとんどを一般売りして収益を上げています。



一八一紙にもおよぶ米紙の歴史的な一面の原板コピーがロビーの壁に埋め込まれている。これはインディアナ州の「サウス・ベンド・トリビューン」紙の号外

ちなみに、昨年の昼食会ベスト3は①女優のウーピー・ゴールドバーグ(出席者四一七人、売り上げ五二八ドル)②オペラ歌手のブラシド・ドミンゴ(四一六六、五九五六ドル)③クレティエン・カナダ首相(三五一人、六六六五ドル)だそうで、ケネディ議員は四位に入るそうです。数でいけばゴールドバーグがトップ。しかし、売り上げでは非会員の招待客が多かったクレティエン首相がナンバーワンということになります。

ところで、文字通り驚愕したことがあります。ワシントンN.P.C.の家賃が年間わずか一ドルだった、ということ。当クラブは全収入の四五%にも当たる額をプレスセンターに支払っています。それでいて、占有面積は当クラブの約三倍というのですから、なんともうらやましい限りです。詳しくは二月号以降で連載します。(一ドルを百三十円で計算)。

◆ ◆
今年二月に長野冬季オリンピックが開催されます。スウェーデンのカール十六世グスタフ国王、

イギリスのアン王女、スペインのフェリペ皇太子など、各国から王室の賓客が数多く来日されます。

また、一月初めのブレア英首相に続き、シップリー・ニュージールランド首相、スカルファロ・イタリア大統領、江沢民・中国国家主席など国公賓の来日、さらにエリツィン・ロシア大統領の名前もあがっております。このうち何人の賓客がクラブを訪問してくれるかわかりませんが、ぜひ記者会見をお願いしたい方々ばかりです。

昨年末のクラブ行事は、五人のゲストを迎えて、昼食会、記者会見、研究会を行いました。その中で、圧巻はやはり、昨年の仕事納め会見を飾ったフォーリー米大使を迎えての昼食会。モンテール前大使のお別れ会見から、ちょうど一年ぶりとなって、大勢の現役記者を含めて出席者二百十六人というにぎわいぶりでした。

◆ ◆
お楽しみ「九七年予想アンケート」の結果がまとまりました。総投票数四四〇票のうち、満点正解者はゼロ。最高が九点で、平均得点は5.3点と例年になく低調でした。

ク ラ ブ ゲ ス ト

鷺尾 悦也 連合会長



「いや、遅れてしまった」と言いながら鷺尾氏が貴賓室に現れたのは、昼食会の約五分前。まず揮毫を依頼すると、「和して同ぜず」とサラサラ。その場の雑談で、金融不安問題に対する連合の考え方を尋ねると、「実は今朝、日経連との会合で、その話が出ましてね。一つは、減税要求で手を組もうということで一致しました。われわれは所得税減税しか言ってませんでしたが、日経連も法人税減税しか言ってなかった。だから、お互いに認めあって、大きっぱです。五兆円減税ということにした。二つ目は……。そこで時間に、「それは、昼食会で」と司会を務めるNHKの小宮山さんが話を切ったが、と

にかく、ざつくばらん。

昼食会は、男女雇用機会均等に関連する労働基準法の改正、金融機関への公的資金の投入問題、政界再編への連合の考え方と多岐にわたった。日本記者クラブでの昼食会は初めてと、最初は若干緊張気味だったが、始まってみれば組合で鍛えた弁舌は立て板に水。会場から募った質問は十一通で、その内訳は、政界再編に関するものが六通、あとは金融機関救済のための公的資金投入問題、春闘に関する質問など。時間びつたりに終了させた司会の小宮山さんはさすがでした。公的資金問題では、それまで連合の方針が明らかでなかったため、数社が「連合も公的資金投入を容認」という記事にした。

鷺尾氏には記念品として金のカフスとタイピンのセットを贈りました。

産経新聞社編集局長兼政治部長

小林 静雄

12・1(月) 昼食会 司会 小宮山
山洋子委員 小林静雄委員 出席
79人

鬼頭 昭雄 気象研究所第一研究室長

エルニーニョ

十二月二日に気象研究所の鬼頭昭雄研究官を迎えて開かれた。同時期に地球温暖化防止京都会議が開かれていたこともあってか関心は高く、六八人が参加した。

エルニーニョはスペイン語で「神の子」という意味だそうで、ペルー沿岸沖などで海面水温が高くなる現象がクリスマスころに起きることから名付けられた。キリストの再来というわけだ。実際のエルニーニョはペルー沖だけでなく、太平洋赤道域の南米から中央部の日付変更線付近にかけての広い海域の海面水温が平年比で数度高くなる現象で、数年に一度発生、半年から一年続く。鬼頭氏は人工衛星が観測した太平洋を中心とする広域の季節ごとの海水温分布や降水量分布などをOHP



で示しながら、海水温と大雨あるいは干ばつとの関係を示した。

ふだんは西太平洋の赤道付近の海水温が高く、上昇気流が活発になって降水量も多いが、これが何らかの原因で東にずれると、中部から東部熱帯太平洋で雨が多く、インドネシアなどで干ばつが起きる。鬼頭氏は一九八二年、八三年、八六年、八七年、九一年、九二年にかけて起きたエルニーニョの際の気温分布や、自身のテーマである気候モデルで解析した結果などを次々示し、解説を進めた。

だが、中緯度地域の気象予報に應用するのはまだむずかしいようで、長野五輪を意識した地元紙記者の冬の暖冬かという質問に対しては「西太平洋で雨が降らない状態がどのくらい続くかを監視すれば……」と答えるにとどまった。

個人D会員(朝日新聞OB)

長沢 光男

12・2(火) 研究会 司会 浅井恒雄委員 出席 68人

ク ラ ブ ゲ ス ト

M・カムドシュ IMF専務理事



マニラでのASEANの蔵相会議に出、ソウルに立ち寄り、対韓緊急支援を決めての東京入りとあって、質問は韓国問題から始まった。日米の圧力で市場開放が支援の条件の一つに加えられたことで、IMFの支援を国辱ととらえるマスコミ論調に配慮してか、カムドシュ氏の発言は慎重な言いまわしが目立った。IMFの援助は当該国のプログラムと実行のための施策を対話のなかで決める国際的な契約で、決してIMFが一方的に指示するものではない、と言いながら、定期的にプログラムの実行をチェックし、行われな

ければ援助はうち切られる、と。融資原則は明快に言い切る。

インドネシアのルビアに関する質問にも、支援開始後わずか期間しか経過していないからと将来について明言は避けたが、ここでも経済には奇跡はないと述べた。

ロシアの政策担当者が代わったが支援方針に変更はないかとの質問には、担当者の異動と支援の方針とは無関係、ロシアの社会、経済を妨げているのは徴税制度の混乱だと指摘した。

司会者が、場内からの原稿送信が許されないこと、一度退席したら再入場は認められないと説明し、外国プレスの人数がいつもよりずっと多かったこともあって、いつになく緊張したムードで会見が進行した。

質問に入ると前方の席の外国プレスから一斉に手が上がって、終わってみたら最近IMFのご厄介になつた諸国の記者の質問がひとわり出そう結果になつていた。司会者は挙手する記者たちの顔つきを見て国籍を見分ける特技を持っているのだ

ろうか。

翌日の各紙の紙面はそれぞれ思いの取り上げ方だったが、会見の場所を「都内」と書いた新聞があった。五W一Hのなかで場所は会見の内容自体にもかかわる重要な要素だと考えるのだ。

松下 康雄 日銀総裁

日銀総裁は、いつ、どこで講演しても演題は『最近の金融経済情勢』と決まっている。きわめて平凡だが、考えてみると当たり前、それ以外につけようがない。

しかし、これも当たり前だが、その内容は毎回、異なる。とくに最近の『金融経済情勢』なるもの、劇的に激動、激変しているからである。



なぜ、「日本記者クラブ」と素直に書けないのだろうか。

個人D会員(共同通信OB)

西山 武典

12・4(木) 記者会見 司会 藤原弥弥委員 通訳 森由美子 キヤサリン・スタターリング 出席 136人

今回の日本記者クラブ昼食会におけるスピーチもしかり。

司会者の「松下総裁は就任して丸三年になりますが、その間の金融政策としては就任早々に公定歩合を一回引き下げ、史上最低の年〇・五%の水準に据え置いただけ。しかし、日銀法二十五条にもとづく日銀特権という「伝家の宝刀」は抜きつばな

して、じゃぶ・じゃぶ・じゃぶ、という挑発に乗ってか、①金融システム、②アジア通貨危機、③景気動向——という激動期の日本経済が当面する三つの危機について、かなり中身の濃い見解を述べ、翌日、全紙の経済面を飾った。

貴賓室での雑談でも「大正十五年生まれですから、昭和二年の金融恐慌の洗礼を受け、激動の昭和

ク ラ ブ ゲ ス ト

を生きてきたことになりす。とにかく、終戦前後まで、時代は経済不安の一時でした。昭和二十五年大蔵省に入省し、戦後は、財政金融政策に一貫して携わってききましたが、経済大国にはなったものの、ニクソン・ショック、石油ショック、日米摩擦と危機の連続」と来し方を振り返って感慨深げ。

そして「その古巣の大蔵省が、名前まで変わってしまうんですからね」としんみり。周知のように大蔵省は百二十八年ぶりに財務省と改称され、本体から金融・証券の検査・監督部門が外局に分離される。

T・フォーリー 駐日米国大使

橋本龍太郎首相が二兆円の特別減

税を発表したその日、しかもわずか



一時間半後という好タイミングで、フォーリー新大使の昼食会見が行われた。満席のフロアからの質問も、経済問題がもっとも多かった。特別減税については、「非常に前向きで、重要な措置と考えてい

民間銀行時代も、太陽神戸銀行からさくら銀行へと合併で名称変更したが、これも金融再編成のなせる業。そして日銀総裁になってからは銀行・証券の淘汰・整理のほか、旧・日銀法から新・日銀法へのバトン・パスやビッグ・バン産役の役割を担う。まこと、激動の時代の申し子のような御仁である。

時事通信社解説委員会顧問

藤原 作弥

12・12(金) 昼食会 司会 藤原
作弥委員 羽生健二委員 出席
20人

る」。しかし、同時にこの措置は「前向きの始まり」とも形容し、今後の追加的な内需拡大策への期待をにじませた。

懸念される貿易不均衡の拡大問題では、一九九八年中間選挙、二〇〇〇年大統領選挙に向けて政治問題化する可能性を指摘して、「直ちに、劇的に変えなければならぬ」と不均衡の是正を強く求めた。

また東アジアの金融・通貨不安に関連した質問に対しても「日本経済の健全性が、この地域の安定のためにも最も重要」と述べた。そして、そのために、日本の内需拡大という、米国の「一貫した期待」への努力を要望した。

このように、経済分野では、日本への注文が相次いだ。さらに、安保の分野では、沖縄米軍基地の整理統合問題、普天間飛行場の返還に伴う名護市の住民投票といった問題で、従来の米政府の公式の政策の枠内で答えた。

通貨・金融だけでなく安保の分野でも日米間の調整が微妙な時期の会見で、新大使は慎重な言い回しに腐心していた。特に、米政府当局者が

最も気にするのは、市場に余計な悪影響を与えないこと。政治家としてはベテランでその調整能力には定評があるが、大使として赴任してまだ一カ月、いつになく緊張した様子で、新大使の顔には汗が光っていた。

韓国の経済危機と朝鮮半島エネルギー開発機構(KEDO)の資金問題をからめた鋭い質問に対しても、外交的発言で切り抜けた。

新大使の肩をほぐすため、「九八年サッカーW杯では、国際的には日本の初出場よりも米国とイランの対戦の方が注目されていますが、日本にイラン・チームの情報提供を求める考えがありますか」という質問も用意していた。しかし、大使がW杯に関心がなく、ヘザー夫人の「仕事」に質問を切り替えた。

ただ、質問が米議会のことに及んだ時は、いつものフォーリー氏らしい自信に満ちた表情に戻っていた。

共同通信社編集委員兼論説委員

春名 幹男

12・17(水) 昼食会 司会 吉村
信亮理事 春名幹男委員 通訳
グレッグ文字 キヤサリン・スタ
ーリング 出席 216人

何回やっても選挙の予想というのは難しい。当たるときもあるが、当たらないときの方が多いかもしれない。ほくにとつて先の韓国大統領選挙もこれで三回目だったが、正直いってはずれた。

接戦になるだろうということはほくを含めてみんな書いていた。しかしこれだけでは面白くないので、公示のころの事前企画であえて、「金大中氏は今回も難しかろう」と予測しておいたのははずれた。

このはずれの原因の一つは、メディア選挙のせいではなかったかと思っている。

金大中陣営の選挙参謀に「金大中氏の選挙における最大の困難さは何か？」と聞いたことがある。その時の答えは、①地域感情②思想問題③マスコミ——だった。

①は「連中は信用できない」という金氏の地域基盤である全羅道に対する差別感情であり、②は進歩派で北に甘いのではないかという考え方への懸念、③はマスコミが厳しいのではないかという、彼らからしての「偏向報道」への心配だった。

今回、四度目の挑戦で当選したということは、これらの障害がかなり緩和されたということの意味するが、③についていえば、マスコミの選挙報道が、以前ほど金大中氏に対して厳しくなかったということとともに、初めて導入されたテレビ討論をはじめとする「テレビ選挙」が、金大中氏にかなり有利に作用したのである。

——金大中氏勝利——

功を奏した イメージ作戦

▶ 黒田勝弘
(産経新聞社)

に受け止められたからだ。

金大中氏の大衆にとつてのイメージは、全羅道差別からくる「信用できない」という一般的なマイナスの先入観に、反政府闘士の経歴からくるコワモテが重なり、どこかうさんくさくて怖いイメージだった。それがテレビを通じ、いつも笑みをたたえた好々爺で、話もわかりやすく、話題の幅も広く、親しみある政治家にイメージ付けられたのだ。

家庭でテレビを見ている有権者は、父母たちは「彼にだまされてはいかん」といつても息子、娘たちは「なぜいけないの？」というわけで、かえって世代的反抗のネタになって、金大中氏に投票してしまった。

対抗馬の二人の李氏は政治家経歴のほとんどない、いわばアマチュア候補だった。超ベテランの金大中氏の方が、テレビ選挙ではるかにうまく立ち回った。金大中氏はもちろん経歴、識見も立派だったが、テレビ選挙におけるイメージ作戦に勝利したのである。

このあたりの「効果」が十分に



当選の翌日、国会に立ち寄った
金大中氏(97.12.19 AP=WWP)

読めなかったことが、ほくが読みを誤る原因のひとつになったように思う。

そして大接戦だったため、テレビの開票速報が有権者を興奮させた。水泳や陸上競技で記録の秒針が進むように、票が積み重なっていく様子が数字の変化となって刻々、テレビ画面に出る。一時は一位、二位がシューゲームを演じた。それを、全国民が手に汗を握りながら見入った。国民はまさに、自分たちの手で大統領を選んでいるという実感を満喫する。「日本とはずいぶん違うワイ」と感を得たのだ。

くろだ かつひろ氏 共同通信ソウル支局長などを経て 一九八九年から産経新聞ソウル支局長

ワーキング
プレス

「理念をしつかりしなきや。例えば平和とか、国際化、環境、若者、ムラの五輪…。マツシロもテーマになるんじゃないか」

「あんまり難しく考えるなよ。スポーツのイベントなんだ」

「まずは具体的な情報。そうじゃなきゃ議論が前に進まない」

昨年（九七年）十月の夜、本社編集会議室で開いたデスクと取材班キャップの会議。出口が見えないまま、時間が過ぎ、「口を滑らかにしよう」と用意したビールの空き缶ばかりが増えていった。

札幌大会（七二年）以来、二十六年ぶりに日本で開く五輪。県民の主読紙として、何を伝え、何を訴えていくのか、キーワード探しがこの日のテーマだった。

例えば「平和」。一線記者から最も多く提案があったキーワードだ。が、具体的な展開案は出てこない。だれも反対できないテーマだけに理屈をこねるほど「平和」の押しつけになりかねない。もう一回足元の動きを洗い直してみよう。取材班に宿題が出された。足元では、五輪をきっかけに、

地域から世界につながる、いわば草の根の国際交流の糸が予想をはるかに超えてつながっていた。長野市内の小、中学校など七十六校で取り組んでいる「一校一国外交流活動」。それぞれ応援する国を決めて知識と理解を深め、人を招いて交流しようという試みだ。

小学生と手紙で交流。対人地雷廃止の学習や募金活動に結びつけた。小児のエイズ感染が欧州一とされるルーマニアを応援する小学校は、エイズについて学び、つながりを持った非政府組織（NGO）の仲介で、エイズと闘う十一歳のルーマニアの少年を迎えた。

列島報告

—長野五輪—

人と人の
「懸け橋」をテーマに

丸山貢一

(信濃毎日新聞社)
(五輪取材班デスク)

一時のイベントに終わったり、活動がパターン化したり、といった批判はある。しかし、子どもたちと先生のパワーが旧来の殻を突き破っている例も出始めていた。ボスニア・ヘルツェゴビナを応援する小学校は、地雷で両足を失った八四年五輪開催都市サラエボの

い、不幸な過去を越えようとした日韓両国の戦前生まれのスケーターたちの物語があった。

人と人の「懸け橋」、こそが、「平和」の礎になる。足元からつながる懸け橋を未来に向けて育てる大切さを訴えよう。取材班の論議はようやく収れんしていった。

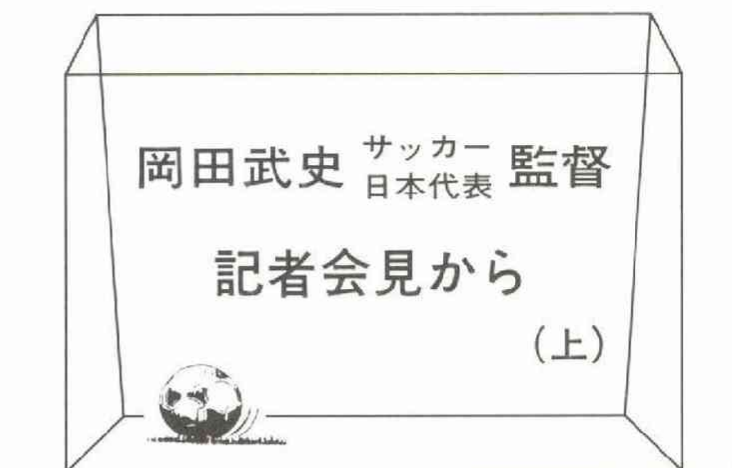
実際の取材に当たっては、懸け橋がかかる先の海外（韓国、中国、ボスニア・ヘルツェゴビナ）に記者を派遣。県内、国内取材とともにその成果を十二月十六日付からの社会面企画「交流の礎―日韓ジュニアスケート10年」（六回）や、新年号特集「心をつなぐ五輪の笑顔」（編集面十一ページ）、新年の連載企画などに実らせた。

五輪の報道合戦はいよいよ本番。戦力豊富な全国紙は脅威であり、厳しさを覚悟している。当初の理念論議が実るような、背骨が通った記事で地元五輪を伝えたい。

（まるやま・こういち）



日韓交流の礎を築いたスケート人の軌跡をたどる



1997年11月28日

私が監督になって二分三勝、まだ五試合しかやっていません。それもおそらく最後のイラン戦、この一試合で私の人生は変わってしまったようです。日本に帰ってきて、どうもいつもと違うなと思っっているうちに、こういうところへ座ることになりました。

控室で記帳をお願いしたいと言われまして、前のページをめくると、ブルガリアの大統領、その前にはファン・セン。聞いたことがあるなと思つたら、やはりカンボジアの方でした。本当に私も書いていいのかと思いました。まだ五

試合しかやっていなくて、それも皆さんがよく

ご存知なのは、一試合だけ。たまたま当たった

んですよね。あれが外れていたら、どうなっ

いたんだらうと思っっています。

ただ、私はサッカーの指導者ですが、常日ご

ろサッカーだけを教えるというより、なんのた

めにサッカーの指導者をやっているのか、とい

うことをずっと考えて取り組んできました。

そして昨日(十一月二十七日)正式に決まり

ましたが、ワールドカップまで監督の契約をし

ました。フランス大会で、いい成績を残すよう

に全力を尽くします。それが何のためになるの

か。きっとそれが自分のためであり、人間のた

めになる、そして人類のためになるようなこと

があるだろうと思いつつ、サッカーの指導をし

ております。

今日は、いつもの記者会見と違ってシビアな

質問がないことを期待しています。

質疑 応答

春名(代表質問・企画委員) 日本は今、リ

ーダー不足の時代ではないかと思っ

ています。岡田監督はサッカーの監督として

は、いささかユニークな方だと思っ

のですが、リーダー不在の中

で、監督が示された指導力というの

が、国民の心を打ったのではない

か。まず、岡田監督の理想的な指導者像、あるいはリ

件についてお聞きします。

岡田 先ほども申しましたように、監督とし

てまだ五試合しかやっていないのに、指導者論

を言えるような分際ではないと思っ

ています。何年かすれば変わることもあるかと思

います。現在、自分が信じている指導者、こうある

べきだと思っ

たことを話させていただきます。

サッカーの指導者というのは、あくまで影の

存在です。たとえば、ワールドカップで優勝し

ても、絶対に監督は表彰台に上

がれません。オリンピックで優勝しても、絶対に金メダルはも

らえ

ません。主役はいつも選手なんです。

監督は常に、選手に何かを教えよう、何かを

やらせようと思っ

ています。しかし本

当は、選手本人が、いやいやではなく

て納得して自分からやっ

ているのです。だから

よくいわれます。わがままな選手によく

デイフェンスさせるようになった。でも、僕が

デイフェンスさせているんじゃない。彼がやっ

ているのです。

僕は指導者として、常にいい選手にな

りたいと思っ

た。思わぬ人は伸びないと思っ

ています。もちろん、指導者はい

い指導者になりたいではなくて、いい選手を育てたい、いいチームを作

りたいという

ことなのです。そこが指導者の一つの謙虚さ

です。一歩下がったところにいるという

立場の違いをわきま

います。

選手を切るのが監督の仕事

それと相反するようですが、指導者は強さが必要です。人間だれでもみんなと仲良くやって、いい人だと言われたいんですけれど、プロの監督は、それはできません。というのは、選手を切るのが仕事です。十一人以外の選手を代表から外さなければいけない。選手にとっていい監督というのは、自分を使ってくれる監督です。これは僕も選手時代に経験しています。どれだけ素晴らしいと言われた監督でも、自分を使ってくれなかったら、いいとは思いません。

そういう意味では、切った選手の奥さんに、にらまれたこともありますし、親御さんから電話がかかってきたこともあります。みんなと仲良く手をつないでやりたいけれど、それが絶対できない。そこで、かわいそうだからというようになことをしていると、第一の目的である勝つということができません。

外人監督が日本で成功しやすいのは、好きなことをやって、日本を離れて帰ってしまえば、その後の付き合いはないわけですよ。日本人監督は何人も切って、親から恨まれて、奥さんからにらまれて、その後、何年も同じ国で過ごしていかなければいけない。これは結構、辛いものがあります。

そういう面での強さが必要です。理論などはみなさん自分なりのものをお持ちですから、まず資質としては、謙虚さと強さ、という二つが必要かと思っています。

春名 質問よりも答えのほうがシビアな感じ
で、ありがとうございます。

勝てばいいんですけれど、負けると日本でも、生卵が飛んだりしました。監督は「自分の支えになってくれたのは家族だ」と言われた。日本人の監督でこういうことを言われたのは、おそらく初めてではないか。日本人の男性は普通、家族のことは言わないのですが、「家族の支え」についてお聞きしたい。

岡田 あの一言を言ったために、家族が大変な目にあいました。ワイドショーなどが押し掛けてきまして、僕が帰る前に女房も断りきれずに出てしまいました。帰ってから処理するのに大変だったんです。

でも、あれは私のあの時の正直な気持ちでした。ずっと苦しい時間がありましたし、監督というのは、最終的に孤独な職業なのです。これは会社の社長さんも同じだと思うのですが、周りにはいろいろな情報をくれます。コーチがいろいろなることを言ってくれます。非常にプラスになりますけれど、最後に決めるのは自分です。その時は、絶対に一人で決めなければいけない。

その孤独感。

家族だけはタマゴを投げない

それと今出ましたように、卵を投げつけられたいです。でも、日本中の国民が卵を投げて、女房と子供だけは投げないだろう。負けて帰っても、女房と子供だけは、「ご苦労さん」と言ってくれるだろうと思いました。そういうことを言ったら、先輩とか友達から「お前は冷たいやつだな、おれがいるじゃないか」という電話をたくさん受けました。

でも、最後に自分を助けてくれるというか、卵を投げないでいてくれるのは家族だけかなと思つたもので、つい、ああいう言葉が出ました。

春名 フランスのワールドカップ本戦に向かうにあたって、私の独断ですが、三つぐらいあると思います。組織作り、情報の収集、戦略・戦術の立案です。フランスに向けての心構えをお聞きしたい。

岡田 私は、サッカーだけではないのですが、まず目標を決めて、そこから順番に下りてきて、この時点でこういうことをしようというやり方をとります。そして、そこからまた下りてきたら、今なにをすればいいか、という考え方をするようになっていきます。

この前までは、フランスに行くという目標がありました。ですので、やることは決まっています。もう一つも負けれない。どちらかというとな非常に簡単だったのです。決断するのも簡単だった。

ところが、今度はワールドカップに出られることになりましたから、まず目標を設定しないことにはどうしようもありません。ワールドカップで優勝するチームを作るのだったら、ブラジル人を十一人帰化させなければいけないし、参加して楽しんでくればいいのであれば、今までの予選のメンバーで「ご苦労さん」と言っに行けばいい。

私はそこで、自分なりに一次予選を突破するという目標を立てました。これは簡単なことではないです。過去四回、ワールドカップに出ている韓国でさえ、一勝もしていません。予選を突破するには、一勝一分一敗でないと、最低限突破できません。その一勝ができるか。不可能ではないと思っています。そういう意味で、目標としてちょうどいいと考えて、一次予選突破を目標に立てました。

攻勢をとれなくてもドロイー

では、そのために何をすればよいか。五月にキャンプができます。ここでは何をしなければいけないと決まる。そうして下りてきて、二月

にキャンプができます。ここでは何をしなければいけないと決まる。

ワールドカップで一次予選を突破するには、今までみたいに攻めているだけではだめです。おそらく攻められない。攻められない試合に、なんとかドロイーに持っていく戦い方、その目標のために何をすればいいのかを、十二月中に作ろうと思っています。頭では大体できてきますが、具体的にこの日に何をやる、というのがおのずと出てくると思います。

北林（毎日） 岡田監督の母校の早稲田大学サッカー部が、この間のリーグ戦で二部に陥落してしまいました。今のご感想と今後、早稲田のサッカー部がどうあるべきかということをお話していただきたい。

岡田 非常に残念でしたが、戦前からやばいなということ、仲間のOBから情報が入っていました。どうみても難しいかもしれない、ということはありません。

今まで早稲田のサッカー部だけが、入れ替え戦を一度もやったことがない、二部に落ちたこともない唯一の大学だったんです。OBにとつては、これは誇りでもありました。でも、いつかは必ず途切れるものだと、私は思っています。逆に今、そういうタイミングで監督になられた先輩、それから選手達に心の痛みというか、

そうしたものを感じています。

早稲田のサッカー部が二部に落ちたというところで、日本の何かが変わるわけでも何でもない。そういう記録は、いつかは途絶えるものですし、僕はそれほど気にはしていません。

ただ、なんとか上がってほしいと思います。今、大学サッカーというのがサッカー界の中で、中途半端な位置づけになっています。いい選手は高校を卒業してJリーグに行く。それだけではないのですが、指導者、設備などいろんな面で、中途半端な位置づけになっている。ですので、早稲田が上がっていくにはそうとうな資金力が必要です。選手補強の面でも、大学側が強くないと難しいだろうと思っています。

川戸（司会・企画委員） それに関連して言えば、高校から大学を通り過ぎてJリーグに行ってしまうのはこれから先、避けられない運命だということはないですか。

岡田 サッカーがうまくなることだけを考えれば、絶対にその方が早道です。ただ、これからはサッカー選手を終えて職にあぶれる選手が何人か出てくると思います。そうした時にみんな気付くとは思いますが、サッカーだけが人生ではないわけです。クラブチームに行きながら大学に通うとか、夜間の通信大学に通うとか、そういう努力をすることも必要になってくる。ま

たは、四年遅れるけれども、大学に行ってから
Jリーグに行く道もあるかと思えます。

今はちょっと華やかなJリーグができていま
して、華やかさに目を奪われて入った選手がた
くさんいると思うのです。しかし、超一流だと
いわれて花形だった選手が、これから職に困る、
食うに困るといふ現実が出てきた時に、初めて
本当のプロ意識というものが、根付いてくるの
ではないかと思っています。

内藤 (NHKOB) 私はスポーツについては
はまったくの素人ですが、今期のサッカー戦は
毎回テレビで見ました。そこで感じたことは、
スポーツというのは「心技体」、つまり心と体と
技の一体化した芸術品であるということです。
しかし、日本のサッカーの試合のやり方を見る
と、技もある、体もまああるだろう、しかし心、
精神力のたくましさというものが欠けていると
いう感じがした。

これは今の日本社会全体に言えることだと思
うのですが、そういう認識は間違いでしょうか。
また、今後チームを育成されていく過程で、何
を一番重要な課題として考えているのか。

岡田 一時、スポーツ界では根性とか精神と
かいう言葉を言うとか非科学的だとか、非常に古
い指導者だと言われたのですが、私が監督にな
って一番最初に言ったのは、精神論でした。

おっしゃるとおり日本人は、非常に満たされ
ています。日本の代表チームの選手は、おそら
くサッカーをやる環境では、世界ナンバーワン
のブラジルと同じ位の環境でやっています。ホ
テル、それからスタッフの人数。栄養士とコッ
クまで付いている。そして洗濯も靴磨きも、全
部オペロという専属の者がやる。海外にいけば、
大使館や駐在の人など、いろいろな人が手助け
してくれています。サッカーだけやればいいと
いう、素晴らしい環境の中でやっています。

そこに、非常に歯がゆさを感じておりました。
しかし、代表チームの選手は、それ以前のジュ
ニアユース、ユース、オリンピックチームの年
代で、もっと厳しい環境の中でやってきて、そ
れを勝ち抜いた選手が集まってきているわけ
です。だから、これくらい褒美をもらえるんだ
というふうにしなくてはいけないとは思って
います。

練習中はファウルをとらない

精神力に関しては、はっきり言って、タフさ
がありません。だから監督として常に言ってい
たのが「一喜一憂するな」ということでした。
一回引き分けたら「しゅん」と元気がなくなっ
て、一回勝ったら「おれたちは強いんだ」とな
る。「そんなことはない」「引き分けても大丈夫
だ」と、ともかく精神的にタフになって欲しか

った。

そういう意味で、私は練習中にファウルを取
りません。ファウルをしてすぐ倒れて、選手は
「ああ痛い!」。僕はそれを無視しています。そ
して「早く立て」と言ったら、骨折していた選
手が一人いたんですけれど、手の骨折で良かつ
た。「ひどい指導者だ」と言われましたけれど、
ともかく、いろいろな意味で、タフになって欲
しかった。それが徐々に浸透してきました。

日本人の選手は精神面で少し幼稚なところが
あります。「フランスに行きたい、よし頑張る
ぞ」と言ったと思うと、「そんなんじや、フラン
スへ行けないよ」——みんなであわあ大騒ぎ
します。

たとえば、UAE戦の時に、1対1の引き分
けでした。でも、あの試合は勝たなければいけ
なかった。ところが、前半1対1で終わってし
まった。するとみんな「1対1じゃだめだ、絶
対勝つんだ」とハーフタイムに大騒ぎしている
んです。

だから、「そうじゃないんだ」と言いました。
「ちょっと冷静になれ、まだ四十五分あるんだ。
八十九分に1点取ったらいいんだ」「後半の四十
五分間に1点取ればいいんだ」と何回言っ
ても、あの時点ではだめでした。サポーターもす
ごく騒いでいる。みんな興奮して「だめだ、だ
めだ、どうしよう」とパニックになって、チー
ムとして機能しなくなりました。

それが、私にとっても非常に勉強になりました。それから、冷静にファイトすることを常に要求しました。九十分間、冷静に自分の役割をやって戦ってくれ、と要求しました。

そして最後のイラン戦。ハーフタイムは1対0で勝っていた。少しはありましたけれど、ロッカールームはシーンとしていました。この時に、こいつらだいたい大人になってきたな、と思いました。そして、試合が終わって勝った時も、泣いている選手はあまりいなかったと思うんです。私も本当は泣き虫なんですけど、本当に涙が出てこなかった。なぜかなあ。みんなが試合が終わっても冷静でいてくれたというのが、私は非常にうれしかった。

おっしゃるとおり、タフさというのは不足していると思います。これはサッカー選手だけではない。今後、私は昨日の記者会見でも言いましたように、グラウンドで百%ファイトする選手以外は選びません。これを聞いて、代表になりたいと思う選手が、各チームで必死になって戦ってくれることを期待しています。

中山（テレビ朝日） かつての読売巨人軍の川上監督は、「鉄の橋を叩いて渡る人」と聞いています。岡田監督はどのような橋を叩いて渡る方か。

それともう一点。イラン戦で中山選手、三浦選手を引っ込めた作戦、そして最後に岡野選手

をつぎ込んだ作戦は、何製の橋を渡った作戦でしようか。

岡田 どういう橋といわれても困るのですが。ただ、私は監督をやっている間、本当に二十四時間と言っているほど、勝つためには何をすればいいかを考えています。部屋にいても移動のバスの中にも、寝ている時もです。夜中にぱっと目が覚めて、これは書き留めておこうとか。要するに、いろいろなゲームプランを考えています。こうなってきたらどうしよう、こうやったらこいつの方がいい、これとこの組み合わせはどうだろう。常に勝つために何をすればいいか考え続けました。これだけは、世界中のそれよりも僕が考えているという自信がありました。その中で最高だと思える選択をする。その時に、今おっしゃったカズと中山を引っ込めることも、僕のゲームプランの中にありました。こういう時は、同時に代えたほうがいいなど。ただ、あの時は私が考えたプランと状況は一緒ではなかったんです。

あの時は1点ビハインドでした。みんなを見たら、特にキャプテンの井原が下を向いていた。これはいけない、よし、ここで思い切って考えていた手の一つを使おうと思ったのです。最初は一人を代えようと思ったのですが、ここで二人いっっちゃえと思って代えたんですけれどね。たまたまそれが当たったんです。

勝つためのゲームプランを考え抜く

自分としては考え抜いた中で一つを選んだだけで、それは評論家に何を言われようが、評論家よりおれの方が考えているという自信がありますし、あれ以上考えられる時間もなかった。できる限りの手を尽くした上での策を打った、という自信があります。

岡野に関してですが、まず岡野をあつきの試合のベンチに入れたのは、戦い方をシミュレーションしている中で、相手のコンディションが崩れるのが予想されていました。ですので、岡野が必要になるだろうと思っただけです。使いたころは、最後の十分か十五分だと思っていました。でも、その前に2対1になったので、二人代えてしまいました。一試合で三人しか代えられな

い。そういう時は、いろいろなことを考えます。キーパーがけがをしたらどうしよう。PK合戦まで行ってしまつて、その時に一人骨折していたらどうしよう。こんなことあり得ないんですけど、十人全員が蹴って、十一人目の勝負になつて骨折しているやつが蹴られなかったら負けだとか。そういう非常に低い可能性のことまで考えます。

だから、どこで投入すればいいかを非常に悩みました。でも、とにかくPK合戦に行きたく

ない。相手がばてていましたから、おそらく延長になっても押すだろうと思いました。ですの
で、押してPK合戦に行くのと、押されたけれ
ど、ようやくPK合戦まで来た、というのと
は違うのです。ああいう試合のPK合戦は、精
神力だけです。非常に不利になるわけです。
なんとしてもPK合戦に行きたくないので、よ
しここで勝負を賭けよう、ということ、延長
が始まった時に岡野を入れました。

川戸 うかがえば、うかがうほど、素晴らし
い采配だと思んですが、歴代の監督との差と
いうのは自分ではなんだと思いますか。

それと、ドイツへコーチの勉強をしにいらし
たということですが、そこで学んだことはどん
なことでしょうか。

岡田 私は前監督の加茂さんから呼ばれて、
アシスタントコーチをやっていましたので、加
茂さんが更迭されたことで、当然私も、非常に
責任を感じておりました。ただ、監督はなっ
てみないと分からないことがたくさんあって、今
になれば、加茂さんに、もっといろんなお手伝
いができたと後悔しています。

ただ、監督というのは比べられないもので、
僕が最後五試合を二引き分け三勝で行けたの
は、その前の加茂さんの三年くらいの蓄積があ
って、初めて行けたんだと思っています。もし、

代用の監督でできるのであれば、ワールドカッ
プ予選の一カ月前に監督を呼ばいいことであ
って、そんなに長い間、高いお金を払う必要は
ないですね。でも、それができないから各国
二年、三年と高いお金を代表の監督に払うわけ
で、加茂さんのあの二年八カ月がなければ、僕
はなかったと思っています。

サッカーのやり方に正解はない

それと監督を比べられないと申しましたの
は、サッカーだけではないかもしれませんが、
正解というのはないんです。戦術とか指導方法
とか、正解があれば、みんな同じサッカーをや
るはずなんです。それは選手もそうです。お
れはイタリアみたいなサッカーをやりたい、お
れはブラジルみたいなサッカーをやりたいと、
選手もいろいろいます。どれも間違いではない
けれど、それではチームにならないわけです。

でも、一つの考え、たとえば右のサイドバッ
クがボールを持った時に全員がよしトッブに行
けるな、そうしたら僕はここのフォロワーに行
く、僕はここのサポートにいこうと動きが決ま
ります。ところが、ある人は逆に行って、ある
選手はいやバックパスするなど戻ってきて、と
なったら、チームにならないわけです。

ですから、同じ考え方を植え付けるのが監督
だと思っています。そういう共通の意識を持た

す、共通の意識を示すのが監督だと思っていま
す。だから、監督の作戦等を比べるというのは
不可能に近い。

二つ目のドイツで何を学んだかということ
ですが、私はドイツに行って、正直言ってサッカ
ーどころではなかった。家族と一緒に行ったの
ですが、受け入れ体制ができていなくて、一番
最初に学んだのが、父親として夜露をしのがせ
る、メシを食わせる、学校に行かせるというこ
とでした。ドイツ語もできないで、新聞を片手
に家を探したりしました。

サッカーをチームに打ち解けて本当にできる
ようになったのは、八カ月くらいたってからで
した。ただ、そこで理論というようなことは結
局、一切学ばなかったと思っています。それは
逆に言えば、日本にいても入る情報の範囲でし
た。僕が学んだのは、強さです。監督としての
強さです。

今でも忘れられないんですけど、ベノ・メ
ールマン監督が休みの日でもいい選手がいれば
見に行く、とにかく休まない。めちゃくちゃ働
く。僕はそのころプロでしたが、まだアマチュ
ア上がりで、いい休養をとらなければ、いい仕
事はできないなどと、うそぶいてたんです。

「お前どうして、そんなに働くんか」と聞いた
時に、プロフェッショナルというのは「フィー
レ・アルバイト・オーダ・ニヒト」とドイツ語
で言っていて、ハードワークかナッシングかだとい

うのです。要するに、ものすごく働くか全く仕事がなくなくなるかのどっちかなんだということですね。これがプロフェッショナルだと。それがなくなったら、家族が食えない。そう思ったら、選手に恩情とかはなかなかかけていられない。そういう監督の強さ、厳しさというのをドイツで学びました。

森本（朝日OB） 今日、岡田さんの話を聞いていまして、大変感心しました。といいますのは、日本のスポーツ選手はインタビュを受けますと非常に短く終わってしまう、話す内容が貧弱で物足りないという感じを受けていたものですから…。

それから、プロ野球の監督などの紹介の時に、出身大学までは紹介されるけれども、学部の紹介はほとんどない。岡田さんに限っては常に政経学部と紹介される。しかも、サッカーで大学に入られたのではなく試験を受けて入られたということが紹介される。そこで早稲田の政経学部で何を勉強なさって、それが今のサッカーにどう結び付いたのかを聞かせていただきたい。

岡田 やたら政経学部ということで、めずらしがられます。早稲田のサッカー部でも、僕しかいなかった。僕はちょうど「青春の門」を読んでいる、大学はどうしても早稲田に行きたいというものがありません。

受験一年目、高校生で三人だけユースに選ばれて、クウェートに行くことになり、合宿をしていました。その合宿所から抜けてテストを受けにくいような状態で、高校の担任からも絶対通らないと言われていました。「でも、いいんです」ということで、早稲田を受けました。ところが、先輩が発表を見に行ってくれたんですが、やはりなかった。クウェートから帰ってきたら、浪人ということになりました。

しようがないなと思って浪人しました。二年目も早稲田を狙いましたが、早稲田のサッカー部の名物監督でいらした堀江忠男先生からも手紙をいただきました。「君は、前年度の成績が、政経学部で合格最低点の半分に満たなかった。君は、どれだけ一年間勉強しても無理だ。教育学部体育専攻を受けなさい」。そういうサジェスションをいただきました。そうなると思計悔しくて、体育専攻は受けられないということで、政経・法・商学部と受けました。

発表は政経が一番最初でした。見に行ったら名前があった。商学部は自信があったのですが、政経が通れば当然、政経に行くので、大阪へ帰ればよかったのですが、ついでに見ていけというところで、ホテルを延泊して法学部を見たら、なかった。これはなにかの間違いな、ともう一泊して、今度は商学部を見たらなかった。やっぱりまぐれか、ということになりました。帰ったら高校の元の担任から、「お前みたいな成績

で受かるから、みんな早稲田に行きたいと言いつつじゃないか」と言われました。はっきりいって僕は今まで、運で生きてきているところがありまして、政経学部に入ったのも、なぜここだけ通っちゃったのかな、という感じでした。

入ってからは、監督の堀江忠男先生が政経学部の教授で、マルクス経済学批判をやっておりましたので、ゼミで私も資本論というのを買いまして、ほとんど分からないんですけど、一応ページはめくってはみました。けれども、残念ながら政経学部でこれを勉強したというものは…。卒論は書いたんですけども、講評は「いろいろな文献を非常に良くまとめた」と言われただけで、内容については一切触れられなかった。その程度なので、これを学んだというものは恥ずかしいながらもいけません。

でも、政経学部というところはいいところなんです。教育学部体育専攻は、出席をしないと単位がもらえない。が、政経学部は、出席をしなくても、テストさえ良ければ点をくれるのです。プロ野球の監督と同じように、あまり学校へは行っていなかったような記憶があります。テストの前だけ、出さうなところを勉強してという感じ。興味ある科目もあまりなかったですから。そういう意味では、大学で何を勉強したかと言われても、恥ずかしい限りでお答えしようがありません。

（次号につづく）

プロフィール

◇個人D会員（五十音順）

□会議報告□

第262回企画委員会

（12・3 大会議室）

「一九九八年予想アンケート」の
題を作成した。

出席 神塚委員長、重村、島田、春

名、藤原、神志名、小宮山、羽

生、川戸、菱山、内山、ワー

グナー、浅井、饗庭の各委員。

第244回会員資格委員会

（12・22 書面）

一月一日付の入退会を審議し、理
事に答申した。

▼タイム誌『桜桃の味』をベスト
ワン映画に 自殺志願の男が死に
水をとってくれる人を探すというイ
ラン映画。十二月のクラブ試写会後、
難解で何がなんだか分からなかった
という声が、ラウンジやレストラン
にあふれたあの作品。ところが、年
末のタイム誌を開いてビックリ。「九
七年映画ベストテン」のなんと第一
位にかがやいていました。

「ハデハデにつくり過ぎる映画が
氾濫する時代に、センチメンタリズ
ムを排し、奇をてらうことなく、し
っかりと登場人物を描き切ってお
り、人間の鼓動が死の瞬間まで聞き
とれるような映画」との評です。昨
今のハリウッド映画に毒された目には
特別に新鮮に映ったのかも。（I）

（十二月一日付入会の個人D会員、法人
賛助会員、特別賛助会員の方々です）

写真郎

写真 香丸 宏

(1979年共同通信入社 仙台支社を)
(経て 東京本社写真部次長待遇)



御殿場市上空約4000メートルで
共同通信社ヘリから撮影

富士よ、しっかり

“風吹かば吹け むらさきに
明けゆく富士の いただきを
見つむるひとみ 理想に燃えて
われら行く 高く 正しく
たくましく”

実はこれは近く姿を消す山一証券の社歌である。西條八十作詞、古閑裕而作曲で、昭和三十二年十月に制定された。山一の前身、小池合資の創始者小池国三は富士の見える甲府市出身。日本一の山にあやかり社名を山一としたのだろう。

たしかに富士は日本人が誇りに思う山だ。私は東京に転勤して一家を構えた時、あいさつ状に「新居から富士が見えます」と自慢気に書いたものだ。もともと東京も空気が汚れ、それにバブル時代の高層ビルの乱立で、富士も見えづらくなったが、秋から初冬の晴れた日には、今も美しい姿を見せてくれる。

日本一の山にあやかっつて、社名に直接「富士」をつける会社が多い。ちよつと思いつくだけで富士銀行、富士写真フィルム、富士重工業、富士通、富士電機等々。「フジ」や「不二」という社名の中にも富士とつながりのあるのが多い。

さて、全国の富士系企業よ！ 金融不安の中で苦しいだろうが、山一倒産の後を継がず、富士の如く生き続けてほしい。

(大谷 健)

「予想アンケート」

郵送投票もできます

一月二十二日(木)に行われる新年互礼会員懇親会で、昨年の「予想アンケート」の結果発表と今年の投票が行われます。投票用紙は、今号と一緒にのお送りしました。このアンケートはまったくの座興ですので、お気軽にご投票ください。懇親会に出席できない方は、郵送でも投票できます。二十六日(月)までに事務局にお送りください。

クラブ賞の締め切りは一月末です

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、一月三十一日(土)までに候補としてご推薦ください。会員およびプレス会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由、参考資料を添えて提出願います。

詳細につきましては、事務局へお問い合わせ願います。

○囲碁の会

第16回大軒杯 小沢氏が二度目の優勝

大軒杯争奪囲碁大会も回を重ねて、十六回目を迎えました。年末の気ぜわしさを一時忘れて手談に興じるのが、恒例となっています。今回は十二月二十日(土)に開催、新井明会長をはじめ二十九人が参加しました。



いつものように、碁力別に四グループに分かれて予選を行い、各グループの首位四人による決勝トーナメントを行う。W杯方式で優勝を争いました。各組

をトップで勝ち抜いたのは小沢信昭(共同通信OB)、高井明昌(共同通信OB)、相川誠一(日本ABC協会)、竹尾新吾(テレビ朝日OB)の各氏。決勝トーナメントの結果、優勝は小沢信昭、準優勝は竹尾新吾の両氏と決まりました。小沢氏は九四年に続いて二度目の大軒杯優勝。優勝カップと新井会長からの会長賞(オールドバー)を重そうに抱えて、出席者からの祝福の拍手を受けていました(写真)。

なお、資格はあったものの時間の都合で決勝トーナメントには参加できなかった松本昭男氏ほか、予選各組の二位(先着順)の山路憲夫(毎日新聞)、田川五郎(読売新聞OB)、中野正彦(共同通信OB)、小野盛四郎(北海道新聞OB)氏らにも特別賞が贈られました。

なお、一月例会は二十四日(土)午後一時からです。

△法人会員代表変更▽

東京メトロポリタンテレビジョン

(新) 清水 務 代表取締役副社長

(旧) 石田 文夫

会員現況 法人会員 一五二社 基本会員 八一八人 個人会員 一、八三三人 法人・個人賛助会員 五八社 一八七人 特別賛助会員 五五人 名誉会員 一四人 計 二〇九社 二、八九七人

一月の行事(5日現在)

22日(木) 午後6時~7時30分 新年互礼会

26日(月) 正午~午後2時 梶山静六前官房 長官昼食会

28日(水) 正午~午後2時 ヨルン・ケック EU大使昼食会

午後3時~4時30分 「98年経済見通し」松島正之日銀調査統計局長

(行事案内電話) 〇三一二五〇三一二七六四

会報委員会

委員長 住田良能

委員 田村欣也 伊波新之助 大空博

榎邑義道 和田千年 塚越喜昭

連絡 長谷川 本庄

(電話) 〇三一二五〇三一二七二二

(FAX) 〇三一二五〇三一二七二二